

秩父神社社報 柞乃杜(ははそのもり)

第 33 号

平成18年7月20日
(川瀬祭)



御製
あゆみよ
月の景も
えてうす
ゆべは今
えもりあらわや

森と水、そして生命

さあ！ ことしもまた、夏のお祭となりました。

暑い夏の日ざしに負けない、元気な子供たちが主役のお祭です。

子供たちに人気の高い暴れん坊の、スサノヲという神さまを迎える祭です。
宵宮の天王柱立神事には、日御碕ひのみさきというお宮からご神体を迎えるのです。

スサノヲの神さまは、大むかし日本の国中に豊かな森を育てた神さま——、
そのおかげで、山々の森が水をたくわえて田んぼをうるおし、川から海へ、
たくさん生きものが栄えて、ひとびとの生活を支えてくれるのです。

本まつりのお川瀬神事は、この森と水に恵まれる生命の神秘な力に感謝し、
どうか、ふるさとの未来を担う子供たちに幸あれ——と祈る祭なのです。

解説 秩父神社(32)

秩父神社権禰宜 甲田 豊治

◆ 鎮宅靈符新(二)

前号に続き述べてみたいと思うが、その前に方位方角に関して、少し触れておきたい社殿彫刻がある。幣殿東側虎ノ門の北寄りに雷神の姿が見える。よく見て戴くと顔は牛のようでも、また虎の顔が描かれたパンツを履いている。この方角所謂表鬼門と言い、丑寅(うしとら)の方角とも言われ、「うし」・「とら」の干支から連想し、一般的に知られるあの「鬼の姿がここから生まれたと言う。更



当社幣殿 東北の雷神

ではこれより靈符の意味するところを見てみる。この靈符は、漢の孝文帝の時代、弘農県の劉進平によつて伝えられたものと言われる。

ある時、孝文帝が弘農県に行幸した際、三愚の地（サングとは、「家の前が高く、後方が低い地。二、家の北側に流水ある地。三、家の巽の方角が高く、乾の方角が平地となる地。」）を言い、家相においては凶相とされる相。）

という悪い地相にも関わらず豪壯な邸宅が目にはいった。かねてから宅地相の理に精通していた孝文帝は、その家を疑問に

よつて秩父の外界から侵入する諸々の災いを除ける意味を持つものとも感じられ、大変興味深い彫刻である。

「わたしの家は、その昔大変貧しく、また数々の災難に見舞わられてきましたが、ある時二人の書生がやって来て七十二種の符を伝授し、この符を畏敬し、修すれば十年にして富貴となり、二十年にして子孫繁榮し、三十年にして白衣の天子がこの家に行幸されるであろうと言ひ残し立ち去つた。その後、書生の言う通りにしたところ、家は幸運に恵まれ、予言通り今天子様までがお出でになつた。」

これを聞いた孝文帝は、この七十二の靈符信仰を広く天下に伝えたと言う。

奇妙な模様であらわした七十二種類の符には、それぞれにあらゆ



熊本・八代の鎮宅靈符

る家の障りが永久に鎮まる威力が備えられていると伝わる。

例えば図一の符は、「招金銀自入

大富貴。」

と言い、家に金銀を招き入れ、自然に富貴する靈符である

としており、また、図二の符は「厭殺星。」

と言い、人の生年月日時に依つて悪しき尅殺の星気に遇い、一生災いが絶えぬことを厭除く靈符であるとしている。

「鎮宅靈符」は、家に降りかかる諸々の災いを鎮め除き、更には、そこに住む人々を護り、富み栄えるものとしてきたことが理解された。当社に伝わる鎮宅靈符とその版木についての伝承の詳細はまだ解明に至らないが、古より大陸から九州は熊本・八代に伝わった符がこの関東は埼玉・秩父まで伝わり現在もこの符を信仰する崇敬者が存在し、またここ数年来、宅地相

に関する問い合わせや来訪者も多いことは、これひとつに妙見星神（鎮宅靈符神）の御神徳によるものと思われ

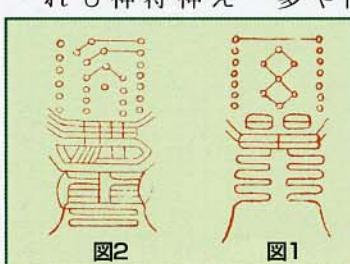


图2

图1

報 恩 感 謝 の 詞

埼玉県神社庁設立六〇周年記念・神社庁主催
埼玉県護国神社「英靈報恩感謝祭」平成十八年六月二十六日



感謝祭」

本日、埼玉県神社庁設立六十周年の記念式典を挙行するに当たり、改めて来し方を振り返るに、我ら国民等しく現在の平安を享受しあることは、まさしくかつて六十一年前に終結せし大東亞の戦ひに散華されたる多くの英靈をはじめ、明治維新以来、内外幾多の戦場に護國のため尊き身命を捧げられし將兵達のこの上なきご功績ありてこそと深く思ひを致し、ここに我ら県内神社界を捧持する全神職総代は、すべての埼玉県民を代表して大前に参る集ひ、この御社に神々と鎮まり坐す本県戦没者すべて五万一千百八十柱の英靈を和め祀り、その高く尊きみたまのふゆを称へ奉るべく、まずは我らが道の先達とも慕ひ奉る

折口信夫大人の命が英靈に捧げし「鎮魂の頌」
詠ひ奉るべし。

思ひみる人の はるけさ
海の波 高くあがりて
たたなはる山も そそれり
かそくもなりにしかなや
海山のはたてに 済く
天つ虹 橋立ちわたる

現し世の数の苦しみ
たたかひにますものあらめや
あはれ其も 夢と過ぎつつ
かそくも なりにしかなや
今し 君 安らぎたまふ
とこしへの ゆたのいこひに

あはれ そこよしや
あはれ はれ さやけさや
神生れたまへり
この國を やす國なすと
あはれ そこよしや
神ここに生れたまへり

この度の表紙絵画は、第六回「ははそのもり美術展」（本年五月二十日から六月四日まで当社平成殿において開催）に出展されました浅見嘉正先生の作品の中から「ははその杜新緑」を掲載させて戴きました。

浅見先生は、秩父神社を表参道（番場通り）正面から描かれましたこの作品は、春のさわやかな新緑の中に見える神門の朱色と街灯の茶色・鳥居と社号のグレーのコントラストが大変印象的に描かれております。

「前々から描こうとした風景であり、難しいアングルからなかなか描く機会を逸し、ようやく昨年の春より作品に取り掛かり、今回の美術展に出品する運びとなりました。そして、神苑の写生では、常に身が引き締まり、気持ちも清々しくなるのを感じました。」と感想を戴きました。

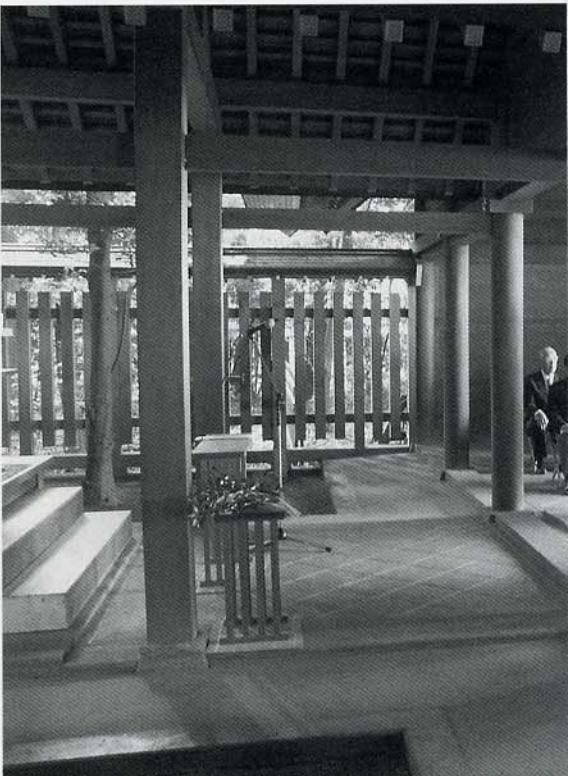
また、この度の美術展に期日が間に合わないため出展する事が叶わなかつた未発表の作品「平成殿バルコニーより望む御社殿」があるとお聞きしており、来る美術展には是非拝見させて戴ければと楽しみにしております。



【表紙絵解説】

この度の表紙絵画は、第六回「ははそのもり美術展」（本年五月二十日から六月四日まで当社平成殿において開催）に出展されました浅見嘉正先生の作品の中から「ははその杜新緑」を掲載させて戴きました。

秩父神社を表参道（番場通り）正面から描かれましたこの作品は、春のさわやかな新緑の中に見える神門の朱色と街灯の茶色・鳥居と社号のグレーのコントラストが大変印象的に描かれております。



埼玉県護国神社「英靈報恩祭」

かくてこそ、汝御靈達この宮に神々と鎮まり給へり。
かくてこそ、我ら神職總代は、挙りて神々と篤く祀るべし。
常永久に、我らはこの宮を祀り継ぐべし。
今日ここに、記念すべき「英靈報恩感謝祭」を斎行するに当たり、参列者一同を代表して大前にこの旨を謹みて奉告し、以て御靈和めと報恩感謝の詞とせむ。

祭典委員長
埼玉県神社庁長 菅田 稔 敬ひて白す

【表紙歌解説】

あふざみよ 月日の影も 天てらす
神代は今に くもりあらめや

一〇四代 後柏原天皇の御製であります。

後柏原天皇は、寛正五年（一四六四）十月二十日後土御門天皇の第一皇子として誕生し、明応九年（一五〇〇）後土御門天皇崩御の後を受けて小御所において践祚し、改めて即位の大典をあげようとされました。しかし、応仁・文明の乱の後をうけて朝廷の経済力は窮迫、また諸国も疲弊しております大典を行える状況ではありませんでした。しかし、大永元年（一五二二）に至り將軍足利義稙より即位の費用が献じられ、践祚後二十二年目にしてようやく即位式をあげられました。

後柏原天皇は、父後土御門天皇の精神を繼承し、乱世でありながらも朝儀の再興に深い関心を示され、春日祭や賀茂祭に勅使派遣など宮中行事重要祭祀などの再興にも意を注がれ、またこの度の歌は、文亀元年もしくは大永元年に行われた神宮仮殿遷座の折に、神祇の祝に寄せてお読みになられた御製であります。

就任挨拶

権宮司 浅見武史



此の度神

社規則変更
に伴い、当

神社も権宮
司制の設置
が認められ、
責任役員会
の格別な思
召しを以つて、不肖私がその任に當
たることとなりました。

たこと

者皆様方の篤いお心根に応ふるべく
箕裘の業の神明奉仕に一意専心努力
致すことを誓い致し、相変わらぬ
御指導・御鞭撻をお願い申し上げ御
挨拶と致します。

福宜新井直行



この度、
永年ご奉仕
されて居ら
れます浅見
福宜の権宮

司昇進就任
に伴い、後
任として六月一日付けを以つて、神
社本庁より福宜の大任を拝命致しま
した。素より浅学非才にして経験の
不充分な者でありますゆえ身に余る
重責を痛感致しております。幸いに
大神様の御加護は申し上げるまでも
なく、諸先輩はじめ偏に氏子崇敬者
皆様方の篤い御指導や御温情によつ
て育てられて参りました事を充分に
自覚しつつ、この上は更に敬神生活
の綱領を胸に刻みながら御神威を畏
み御加護を仰ぎ、御神徳の発揚と御
社頭の隆昌に力を尽くし、中今の早
い流れに自分を見失う事なく、緩急
の波を乗り越えられるよう努力す
る所存でございます。何卒今後共、
格別の御指導を賜りますようお願い
申し上げ、就任のご挨拶と致します。



就任挨拶

氏子青年会前会長 丸岡庸一郎

平成十八年度総会におきまして、会員の皆様にご承
認を戴き、第七代会長に就任致しました。
氏子青年会も平成二年の創立以来、その時代に応じ
た事業が行われ、更にここ数年では事業部制も確立し、
多くの会員の参加を戴いた様々な事業が行われてまい
りました。

会の発足当時に比べますと、時代は様変わりし、私たちの地域だけでなく、日本の国自
然も様々な問題が山積し、加えて、これから世の中が良い方向には向かっていかないと考
えている方も、増えていくようと思われます。このような時代にこそ、「秩父神社を中心と
文化的な秩父のマチ造りの推進」という会の目的を忘れる事なく、原点を踏まえながら、今まで以上に多くの会員の皆様が参加できる事業、研修等を開拓していくたいと考え
ております。
会員の皆様の要望を踏まえながら、役員一同精一杯の努力を傾ける所存でございます
ので、ご指導、ご理解、ご協力の程よろしくお願ひ申し上げます。また新井康夫会長をはじめとする協力会の皆様の力添えをお願いし、併せて退任されました正田前会長に感謝申し
上げまして、新役員を代表してのご挨拶に代えさせて戴きます。

退任挨拶

氏子青年会前会長 正田裕幸



兩宮司さまの薰陶を受け厳しくも充
実した七ヶ年を経て、昭和四十九年
六月当社に奉職。爾来早くも三十余年
が過ぎました。

私達にとりまして懐かしい先代武
男宮司さま、木野、寺澤両補宜さま
達が戦前・戦後を通じ寝食も忘れて
護持された柞の杜。とりわけ昭和四
十一年九月の台風禍による御社殿の
倒壊。この時四人の先代達は還暦も
過ぎた奇しくも今の私の齢で、今日
の当社の礎を見事に築かれました。
今更乍ら御苦労の程を偲び、先人達
に依り培われた床しい社風を次代に
伝へ、当社にお寄せ下さる氏子崇敬

き、特に伊勢神宮の参拝におきましては、御正殿の近くまで進ませて戴きましたことに、改めてこの職務の偉大さを感じました。
また、日頃は何気なく過ごしておりますが、自分が窮地に追い込まれると神頼みをする事が誰しもある事だと思います。当家でも心の置きどころ、精神の安定を願うために、家族が一日無事故で安泰でありますことを切に願うようになりました。
会長職というものは大変でしたが貴重な体験をさせて戴いた二年間で、改めて皆様方のご
協力に感謝申し上げると共に、秩父神社のご隆昌、また当社のご加護を戴きましたこと、
年会が益々発展致しますことを祈念申し上げまして、退任のご挨拶とさせて戴きます。

秩父宮会研修旅行報告

五月十四日～十五日

事務局員 新井君美



於 下鴨神社

千年の都が置かれた古都京都。激動の幕末にあつて時の孝明天皇の警護にあたるべく、京都守護職に任じられた会津藩主松平容保卿は秩父宮勢津子妃殿下の祖父にあたり、その本陣が置かれたのが金戒光明寺である。一ノ谷の合戦で平敦盛を討つた熊谷直実が、世の無常を感じて出家した寺としても知られ、浄土宗大本山に数えられる名刹である。

その裏山を少しばかり登つた所に会津藩殉難者の神道墓地がある。会津藩

士三五二名の墓誌の傍らには勢津子妃殿下お手植による楕の木があり、毎年六月には会津松平家の当主を招き慰靈法事が営まれるという。

そこからわずか離れた場所に江戸前一期の儒学者で垂加神道を首唱した山崎闇斎の墓を見つけた。会津藩の藩祖である保科正之卿は、その神道説に強く影響を受けたことも知られ、何やら不思議なご縁に感銘を深くした次第である。

翌日は天候にも恵まれ、早朝より嵯峨野あたりを散策し、その後、下鴨神社にて葵祭りに参列させて戴いた。都に初夏の訪れを知らせるこの祭りは、平安の雅を今に伝える祭礼行事であり、十二単衣の艶やかな女性の姿は、さながら源氏物語に描かれた往時の女人達の姿を彷彿させるものであった。

歴史絵巻を垣間見たような驚きと古都ならではの発見もあつて、短期間ながら有意義な研修旅行であつたと思う。



於 会津藩士神道墓地

着任のご挨拶

権 櫄 宜 蘭 田

建(34)



この度、四月一日付けをもつて秩父神社権 櫄宜を拝命致しました。蘭田建まで、これまで八年のあいだ大過なく奉職して参りました、歴史と文化の香り豊かな古都・鎌倉に鎮座する大社、鶴岡八幡宮を辞して、生まわれ故郷の神話の里、この秩父に家族を伴つて無事帰郷致しました。

鶴岡八幡宮では、吉田茂穂宮司さまをはじめ諸先輩より数々の教えを賜りました。それを無上の糧として、関東最古の歴史を誇る柞の杜と山水の清流に恵まれた、ここ秩父神社に奉職が叶いましたことは、やはり神々の暖かいご神徳と、ご指導を戴いた不思議なご縁に感謝を深くした次第である。

この上は、累代の神主家長男に生を授けた宿命を覚悟し、その重圧に挫けることなく、卒直赤心の精神をもつて神明奉仕を心掛ける所存であります。また、そうした奉務を通じて、当社職員並びに関係各位と共に、秩父が秩父であるための武甲山を中心とした自然風土の再生と地域文化の発展とに寄与すべく、何とぞ地元皆さまの暖かいご指導ご鞭撻のほど心よりお願い申し上げます。

編集後記

■天王さまの守護により、真夏の強い日差しのなか、子供たちの健やかな成長を願い、ここに社報柞乃杜第33号川瀬夏祭号をお届け致します。

■七月に入つて各地で、台風でもないに突風現象が起り、ニュース等で報道されその被害を目の当たりにしました。

実は、秩父においても本年四月三日の長滝は寶登山神社の大祭日に、強風に見舞われ、当社神門東側の御神木である銀杏の幹およそ二十五メートルほどが新崇敬会館平成殿側に倒れかかり、大型クレーンを用いて撤去するほどの大きな被害となりました。

幸いにも昭和四十一年発生した台風被害には至りませんでしたが、同じご神木が被害を受けたため、至急樹木医による手当てが行われ、今は樹勢回復を日々願うだけであります。

※本報の用紙はグリーン・ユトリロマット100の再生紙を使っています。



平成十八年(2006)七月二〇日

編集発行 秩父神社社務所
〒368-0413 埼玉県秩父市番場町一-一
TEL(0494)22-10262
FAX(0494)24-15596
印刷所 有限会社 拡文社 印刷所
〒368-0433 秩父市東町二七一八